

ベルクソンの意識概念

平井, 靖史
福岡大学人文学部 : 教授

<https://doi.org/10.15017/4150382>

出版情報 : 哲学論文集. 56, pp.77-107, 2020-12-15. 九州大学哲学会
バージョン :
権利関係 :



ベルクソンの意識概念^①

平井靖史

ベルクソンの哲学から、「意識の理論」と呼べるものを引き出すことは可能だろうか。「意識」(conscience)という単語は、彼の全著作を通じてかなり高い頻度で用いられる。^②意識現象の様々な局面について、彼は多くのことを語っている。第一主著である『意識に直接与えられたものについての試論』から、意識事象間の「相互浸透」によって織りなされる「錯雑な多様体」(multiplicité confuse)を空間の「判明な多様体」と対照させていた。第二主著『物質と記憶』の「記憶の逆円錐モデル」は記憶の動的再編成として心を描くものであり、「純粹知覚理論」は意識的知覚が物質のシステムの減算的に成立することを示す。そのほか、情感、注意、再認、一般概念、エピソード想起、夢想といった様々な意識事象についても、独自の見解が示されている。『創造的進化』では、意識は生物進化における本能と知性の分岐を辿りながら論じられる。

しかしながら、こうした個別には興味深い各々の道具立てが、互いにどのように組み合わせたり、どのような全体像を示すのかについては、彼自身がそのような総合をしなかったこともあり、見通しが悪い状態にとどまっている。本稿は、これらの部品から、ひとつのまとまった全体として「ベルクソンの意識の理論」を復元しようとする試みである。

全体を包括する枠組みとして、一つのマルチスケール時間論を置く(4節)。これは彼の学説の中では「持続の多元論」と

して展開されているものであるが、対立する還元主義的な見方に対する正当化を補う形で再構成する。上位時間スケールが、下位スケールに還元されない固有の実在性を持つとする、この多階層的時間論がすべての屋台骨になる。この枠組みを明確化し、そこに位置付けていくことで、バラバラに見える個別の諸論点をかなりの程度統一的に理解できるはずだ、というのが本稿の見立てである。

再構成を目指す上で、特に注意を払ったのが、「意識の多義性」と「意識の二面性」を区別することである（3節）。意識には、それぞれ別の発生論的段階に位置づけることができるような複数の「機能」がある。日常語における「意識」の多義性は、それらのいくつかを拾っている。他方で、哲学的な議論で明らかになっているように、意識には機能面と現象面がある。したがって、区別される機能ないし段階の数だけ現象性も区別されうる。そして、同じ機能を現象性なしでも作ることが可能である限り、説明責任は、意識の各機能の成立だけでなく、それぞれの現象性の成立についても存在する。つまり、意識の各機能を説明すれば意識の説明が終わりとはならない。

例えば代表的なものとして、意識には「感覚質」と「気づき」の用法がある。本稿の整理するベルクソンの見解にしたがえば、これらは現象と機能の区別ではない。両者は異なる発生機序を持つ、二つの別個の機能であり、そのため、それぞれに固有の現象性がある。〈顕著刺激を検出する〉という気づきの機能とは独立に、感覚質には、〈ミクロな諸状態をシステムにとって必要十分な粗視化の度合いで識別する〉という機能がある。後者に、赤の赤さやキウイの酸っぱさのような現象性が備わるように、前者には何らかの「感嘆符」的な現象性が備わる。

出来上がる仮設的解釈は以下のようにになる。時間的に粗視化された感覚質の登場を第一段階として（4-1節）、大きくは四つの段階を識別することになる。第二段階として、進化がもたらした感覚と運動の間の識別可能性ギャップが、（単なる時空的近傍での粗視化ではない）典型的に粗視化された質次元が世界に追加される（4-2節）。第三段階として、同一個体内での複数の運動反応の間の遅延差による（ボトムアップの）「気づき」を取り上げる（4-3節）。第四段階の意図・心的

因果は、物理階層からの相対的な離脱によって可能となる動的な、スケール可変性によって実現される（4-4、4-5節）。それぞれの機能は、マルチ時間スケールの相互作用モデルで捉えられた生物システムの、異なる仕方での時間的変形によって実装されており、これがそれぞれの現象性をもたらす。

1. 意識をめぐる哲学的な困難

考察に入る前に、まずは一般的な注意点として、意識をめぐる諸仮説の論争には、ある際立った困難がともなうことを確認しておきたい。一般に、ある理論がある事柄の説明を与えようとするとき、何をそれとみなすかという対象の外延が前提とされている。ところが意識的存在者として何を数えるかについて、そもそも常識の直観が安定していない。当然、理論家もそうした不確かな直観を出発点にして理論を組み立てざるを得ない。だから、意識の諸理論は互いにずれた対象群をターゲットにした論を組み立てることになり、対象の範囲が異なれば理論が異なるのも当然なので、全体として議論がマッチョプの様相を呈することになりがちである。

ベルクソンはある箇所で、一般観念の起源をめぐるパラドクスを取り上げて、抽象が先かで争っても双方が互いを前提とするため決着がつかないことを指摘している（MM, 174-175 [227-229]）。例えば、大量に存在している犬が共通して持つ性質を適切に抽象できるためには、最初に犬のセットを決めなければならない。しかしどれが犬かは、その共有される性質を何とするか次第で変わってくる。外延の確定には共通性質の抽象が前提となり、適切な抽象には外延の確定が前提となる。だから、この種の循環は、意識に限らずあらゆる一般概念に原理的に生じる問題ではある。しかし、犬の場合であれば、多少の境界事例があったとしても、それなりに安定した直観が共有されている。これに対し意識の場合は、幼児に感覚意識すら認めない論者もいれば、白黒の部屋を出たメアリーが新しい経験を得ることはないとする論者もいる。⁽⁴⁾人間

でさえそうなので、生物全体ではさらに混沌とする。物質にも要素的な意識を認める汎心論も忘れてはならない（本稿ではベルクソンの汎心論は扱わない^⑤）。また、同一の論者が、理論や知識への習熟によつて直観を大きく変える可能性についても忘れてはならない。私自身、おそらくゴッドフリー・スミス（2016）やファインバーグ＆マラット（2016）らの重要な仕事に親しむ以前には、頭足類が意識を持つ可能性について真剣には考えなかったはずである。そしてもちろん、こうした意識の仮説をめぐる原理的な困難を、ベルクソンだけが免れているわけではない。決着は、結局のところ、理論全体としての理解可能性、既存の知識・理論・直観との整合性という、最も不確かで、しかし結局のところそれしか確かなものはないそれに委ねられることになる。本稿において私が、可能な限り全体像を描き出すことを優先するのはそのためである。

2. ベルクソンの意識理論の三つの特徴

意識の理論としてみたときのベルクソン哲学について、まず、以下の三つの特徴が目を引き。すなわち、①発生論的観点をとる点、②単なる相関関係でも必要十分条件でもなく構成的説明を与える点、③意識の多義性をカバーしうる包括性を持っている点、である。

第一に、たんに現に存在してしまっているものとして意識を扱うのではなく、宇宙の歴史の中でどのようにして意識が発生してきたかに着目する。ベルクソンの処女作が『意識に直接与えられたものについての試論』と題されているところから、その哲学は意識を「所与」とみなし、それをただ記述するタイプの哲学であると誤解されることがある。しかし、すでに同著作には生物学的な説明の試みは見られるし、とりわけ第二著作『物質と記憶』以降は、自然世界の中で意識の成り立ちについて明確な探求姿勢が打ち出されるようになる。ベルクソンは、けつして物理的な還元主義者ではないが、他方で、意識のことを、なぜそうあるのかを原理的に問えないような種類のアプリオリな存在とも考えていない。ベルクソンは、意識

的知覚が帰結する必然性を語り (MM, 27, 29)、知覚からは今度は情感の必然性 (MM, 57)、さらには独立の実在としての精神の必然性 (MM, 77) まで、しかじかの条件が整えば、しかるべきものとしてこれらの心的事象が成立してくることを語っていく(それゆえ、ベルクソンは哲学的ゾンビを認めないだろう)。かすかなホワイトノイズに過ぎなかったかもしれない意識^⑥が、進化の中でどのようにして高次な知性へと目覚めていったのかを合理的に説明しようという探求姿勢をもつ点で、——哲学的通念に反するようだが——意識を広い意味での「自然現象」とみなす立場に数えられると私は考えている。

第二に、単なる(脳構造などとの)相関関係でも必要十分条件でもなく、(現象的経験が何でできているかという)構成的関係を扱っている。脳神経などの特定の構造が意識に対応することを主張する理論は少なくないが、それらは、そもそもどうして当該の構造によって、意識の現象面が実現されているのかについての説明を必ずしも与えない。神経相関は、物理状態と意識状態の「対応」ないし「随伴」を述べているだけで、肝心の、なぜ、どのようにして現象的な意識内容が作られるのかについては、何も語らない。これに対して、ベルクソンの凝縮説は、時間的にマクロな存在者が膨大な数のミクロな物理事象と相互作用する際に構造的に成り立つ時間的な粗視化(粗視化の主観解釈ではなく相互作用解釈、4-1節にて後述)によって感覚質を理解するため、感覚質をミクロな物理事象とは別個に新しく産出された存在者と見なさない。(外受容)感覚質とは、マクロな階層において時間圧縮されたミクロな物理事象そのものである。この意味で、両者は単なる相関でも、因果関係でもなく、また(圧縮が入るため)同一性でもなく、構成関係に立つ^⑧。これが自然の中での現象性の成立にとって重要な理論的な一手であることを強調しておきたい。

第三に、意識の悪名高い多義性を、そのどれかに限定してではなく包括的に扱っており、かつ、それらの多様な意味をつなぎ合わせる(可能性のある)一貫したヴィジョンを提供する。「意識」という語は、感覚質、気づき、注意、意図、心、自己意識、覚醒など、互いに重なりつつも異なる意味へと分岐している。これらにはそれぞれ異なった機能的な役割がありうるし、その現象的なあり方においても当然異なっている。それが意識の論争において多くの概念的な混迷を招いていること

もしばしばである。⁽⁹⁾ 例えば、はじめに「感覚質」の意味で同定しておきながら、議論が進展するにつれて「気づき」(次節で示すように本稿では *awareness* を指す訳語として用いる) の意味にスライドしてしまっているなら、整合的な議論は望めない。確かに、こうした複数の意味の間の相関図を描くことは、ベルクソン自身が明示的に行なっているわけではない。しかし、ベルクソンの論述でその多くがカバーされているこれらの多義性を、本稿で示すようなやり方で位置付け直すなら、それはベルクソンの意識理論全体の見取り図を作ることになると同時に、概念的な混乱を避けるための一般的なチェックリスト(のたたき台)として役立つかもしれない。

3. 意識の多義性をどう分節するか

ベルクソン自身は文脈に応じて自在に言葉を用いる傾向があり、同じ語が異なる意味で用いられたり、逆に同じことを指すのに別な言葉による言い換えを行ったりするため、以下の論述にてベルクソンの意識理解の見取り図を再構成する準備として、まずは中立的な用語を用いて、要素的な意味を以下のように分類しておくのが得策である。それぞれの名称は必ずしも一般的なものではないかもしれないが、以下の議論で混同を避けるラベルとして機能することを目的としている。

- a. 感覚質 (*sensible qualities, qualia*)。物理学が想定するような物質では説明できないとされる、現象的経験に特有の質的なあり方。体性感覚や想像など「それを味わうことがどのようなか」という主観的な感じ全般を指す(つまり諸機能のなかの一つとしてではなく現象性全般を指す) 場合が多いが、外受容感覚のみに限定する場合もある。クオリア。
- b. 気づき (*awareness*)。全体の中から特定の一部の刺激が顕著なものとして浮かび上がることに。特に、ボトムアップで対象の側から自然発生的に生じるケース。

- c. 注意(attention)。上と同じ「部分の切り出し」がトップダウンで主体の側から生じるケース。能動的・意図的な気づき。
- d. 自己意識(self-consciousness)。自らの心的状態についてのメタ認知。
- e. 心(mind)。気づきや注意の及ばない要素を含めた全体を指す⁽¹⁰⁾。
- f. 覚醒(wakefulness)。睡眠や麻痺状態と対比される状態。

例えば、調子外れの音が「意識」に上るときはbの意味、音色の変化に「意識」して聞き耳をたてるというときはcの意味(これはほぼ意図的という語と重なる)、自分が聞き耳を立てているということ自体を「意識」しているときはdの意味である。eはb・dの意味では「無意識」と呼ばれるものを含むが、心を持たない物質と巨視的に対比する文脈では「意識」と呼ばれうる。

さて、本稿冒頭に触れたように、こうした多義性相互の間の概念的な関係を見出す上でまず注意しなければならない点は、意識の機能面と現象面の混同であろう。意識がそもそも機能的役割を持つかということ自体についても議論がありうるが、進化の中で意識を捉えるベルクソンにとって、意識が機能を持つこと、因果的な役割を持つことは疑問の余地がない⁽¹¹⁾。そのため彼自身の論述において機能面と現象面がしばしば一緒に登場することになる。本稿の目的のためには、こちら側で、概念上のより分けを慎重に行う必要がある。

例えば、「気づき」は多くの場合、手放して現象的と考えられがちだが、そこには落とし穴がある。「背景的な刺激全体の中から特定の部分が切り出される」状況を想像すると、自らが意識的存在者であるわれわれは、自らの気づきや注意経験をうっかり投影してしまいがちである。だが、この「部分切り出し機能」そのものは必ずしも現象的経験を要求するものではない。このことを見てとるには、モーションセンサーやスマホの顔検出機能を思い起こせば十分だろう。現象性は、機能を説明すればタダでついてくるものではない。

したがって、われわれが気づきや注意を「意識」現象として考えている時には、この「部分切り出し機能」そのものではなく、これに随伴する現象的な側面のことを思い描いているはずである。そして、部分切り出し機能一般に現象性が必然的に随伴するのでない以上、この現象性は追加の説明を要求する。とすれば、気づきや注意のことを意識とみなしたくなる常識的直観の「正体」は、この「別な要因」の側にあることになる。この別な要因は、部分切り出し機能とは全く独立の何かかもしれないし、ある特定の仕方であらわされた部分切り出し機能に随伴するものかもしれない（ベルクソンは後者である）。

さらに、そもそも「b. 気づき」と「c. 注意」の区別自体、つまりボトムアップとトップダウンの区別自体が、実は現象経験に訴えてなされている可能性もある。例えばこれらの機能を機械で実現しようとすれば、顕著な刺激を検出するものも指定の刺激を検出するものも、つまるところ（入力全体を走査して当該の条件にヒットするかを総当たりにチェックする）プログラムになることから、純然たる機能面だけでは両者にさしたる区別はないことがわかる。違いは目的の検出条件がどのように与えられるかではないが、機械にしてみればどちらも所詮外から与えられるものでしかない。アプリがスパムの警告をしてくれたり新しいアルバムを推薦してくれたり指定した条件で図形を検出してくれたからといって、それが意識的な気づきや意図的注意を持つと考えるだろうか。したがって、実現されている機能だけ見てもボトムアップとトップダウンの区別は名目的にしかできない。

逆に、現象的な観点から見ると、受動的に、ある種の驚きとともに違いを受け取る「気づき」と異なり、「注意」では能動的・主体的な「意図」が立ち上がっているのだから、その違いは歴然としている。実験者に注意課題を依頼された場合、機械の場合と同じく被験者にとっては「外から」指示された検出条件ではないのだが、その指示に嫌々従う場合でさえ、それを「自ら」積極的に探しているという主体感が伴う。目的の特徴を目を皿のようにして探している際には、受動的な気づきにはない一種の心的緊張も感じるだろう。意図的に何かを探すこの独特の感じは、何に起因するのか。同じ機能を果たすプログラムにはない何が、この感じを生じさせているのか。

たしかに、われわれの脳において、ボトムアップ制御とトップダウン制御の経路は互いに大きく異なっていることがわかつて¹³⁾いる。しかし、前部前頭葉からくるにせよ、頭頂皮質からくるにせよ、それらはタンパク質でできた繊維の塊であり、流れているのは電気信号である。前部前頭葉からの経路を「トップダウン」と呼ぶのが厳密に脳回路の話でしかないことを忘れてしまつて先述の「うつかり投影」でもしない限り、それで現象的な意図性が説明されたということにはならないはずだ。そこに成立しているはずの、しかし単なる物質的経路そのものではない何らかの「別の要因」を同定する必要がある。次節以降で、マルチスケールの時間構造に依拠するベルクソンの議論を、このような探求プロジェクトとして読み直せることを具体的に示していく。

4. 上位時間スケールはなぜ還元されないか

感覚質から気づき・注意・心に至るまで、ベルクソンは一貫してマルチスケールの時間論（持続の多元論）の枠組みを用い、それによつて段階的に果たされる識別可能性次元の拡張と変形として意識の諸局面を論じている（平井（2019a））。ベルクソンの各論点がこの枠組みのもとで解釈できることを示すためのテクニカルな正当化は紙幅の都合で最小限にとどめ、本稿では、事柄としてどのように整合的に理解できるかという点に重点を置いて論述していく。

世界を、静的な事物ではなく様々なスケールの「相互作用」の織りなす総体として考える。生物は、環境との間で感覚入力と運動出力の相互作用を行う中程度スケールのシステムである（ベルクソンは身体のことを「感覚―運動システム」(système sensori-moteur)と呼ぶ)。こうした比較的大きめのスケールの相互作用は、その生物を構成する器官や細胞、あるいはさらに遡つて分子レベルなど、よりミクロなスケールの相互作用に比べて、実在性が劣るわけではなく、それらに還元されないと考える。これにより、心的因果（意図の実効性）や自由の問題の立て方が大きく変わってくる。¹⁴⁾

複数のマクロな時間階層が、ミクロな物理階層に還元されることなく、世界の側で存立することが鍵となるのだが、そうした考えがどのようにして正当化されるかを、ベルクソン自身がそれとしてみとめて論じてくれているわけではない。しかし、彼自身の諸議論から、以下の二段階の根拠を推察することができる。第一に、スケール差に起因する粗視化が、上位スケールにおいて作用の新しい要素的単位をもたらす点（「凝縮」説）。そして第二に、類似性の離散化と再配置とでもいえるべき変化が生じるという点（「生きられる類似」説）。

4-1. 凝縮

まず、この粗視化は理論家のような外的観察者による主観的な粗視化ではなく、スケールをまたいだ相互作用によって世界の中で実現されている粗視化である。これをここでは仮に（粗視化の「主観解釈」と対比して）粗視化の「相互作用解釈」と呼ぶことにしよう。相互作用解釈のもとでの粗視化が心的な意味での主観を前提しないことを、ベルクソンは時間にかんするコレージュ・ド・フランス講義において詳しく説明している。

鉄道の駅で見かけるような、ああいった自動の秤ないし台秤が一つあるとしましょう。…重さを記す秤の針が、例えば、5の倍数しか示さないようなメカニズムによつて動いていると想定することはまったくもって可能です。…そして重さが $2\frac{1}{2}$ と $7\frac{1}{2}$ のあいだにある場合にはつねに5を示すという仕方では、秤が作られていると想定します。したがって、 $7\frac{1}{2}$ と $2\frac{1}{2}$ のあいだには無限に異なる重さがあるのですが、それらはみな5と示されるわけです。針という秤の動く装置は、或る選択をしたことになりまし、似ていないものを似たものとして近づけたことになるでしょうが、それは単に、知覚装置があらゆる可能な事物を知覚しうるのに対し、行動装置が決まった数の可能な行動のあいだでしか選択肢を持つてゐないからと（CdFT, 66-67 [72]⁽⁵⁾）。

ベルクソンの相互作用解釈のもとでは、粗視化の水準は、外から観察・記述する者によって恣意的に設定されるものではなく、〈当該の相互作用を担う対象（この場合は秤）自体の出力の側の分解能が入力 of 粒度を決定する〉ことによって世界的に説明される。次の第二段階で見るように、ベルクソンの知覚理論は、まさにこの考えに依拠して構築されている。

そしてこの秤の例を、時間次元で考えたものが、ベルクソンが『物質と記憶』第4章で展開する感覚質についての「凝縮」(contraction) 説である。ベルクソンは、エクスナーによって当時知られていた人間の（聴覚の）最小弁別単位として2ミリ秒という数字を引き合いに出し、他方で、可視光のうちもつとも波長の長い赤色光線でさえ毎秒400兆回の振動からなることと比較する（現代では視覚の時間分解能はさらに低く20－30ミリ秒であることが知られている）。両者の時間スケールの落差のために生じるこの大幅な時間的粗視化によって、感覚質の成立を説明する。「知覚は、それ自体では数えきれないほど多くの瞬間へと繰り広げられるはずのものを、私の持続のたった一つの瞬間のうちに凝縮している」(MM, 233 [301])。そして、「感覚的性質の主観性は、…複数の瞬間を…単一の直観の内に凝縮することに起因している」(MM, 246 [317])。

一般に、クオリアの説明をする際に、対比として「物理事象としての光そのものが赤いわけではない」という言い方をするが、ベルクソンの観点からすれば、赤の赤さという感覚質が物質に見出されない（単に量的に扱いうる）のは、物理事象が（適切にも）物理事象に固有のミクロなスケールで扱われているためと考えるわけである。¹⁶⁾

生物の相互作用システムにとって、環境との相互作用は「感覚－運動」という相対的に大きな時間スケールの単位で営まれる。合わせて、（おそらくはシステムが内部的に扱いうる情報量の制約により）システムの弁別可能な最小時間単位も底上げされる。これを、システムに相対的な「瞬間」と定義する。人間の視知覚の例では、20－30ミリ秒というサイズが、それ以上分解不可能な「瞬間」となる。ミクロには、この一瞬間のうちに、数多くの下位スケールのイベント（この場合は振動）が識別されるにしても、それは上位スケールにとっては潰れてしまう。しかし、識別閾以下の量的な違い（たとえば同じ20ミリ秒に8兆回の振動か16兆回の振動か）は、システムにとって完全に等しく現れるのではなく、時間圧縮による融合の効

果として質的な違いに反映され、これが上位のシステムにとつての識別子として機能する。これが感覚質の起源だというのが凝縮説である。

知覚される二つの色の還元不可能性は、われわれにとつての一瞬のうちに…何兆もの振動が凝縮されているような、そうした狭められた持続 (*étroite durée*) に起因するのではないか (MM, 227-228 [294])。

例えば、これと同じ機能は、識別要素ごとに恣意的に外付けのラベルを付与することでも実現できるだろうが、その場合、現象面の説明は手付かずに残される (クオリアの志向説を取らない)。この機能を凝縮によって実装するベルクソンの説では、二節で触れたように、新しい現象的質そのものが時間上の構成的関係によって説明される。なお、凝縮が「記憶力」と呼ばれるのは、物質の時間スケールで見ればすでに過去であるはずの大量の振動が、感覚的存在者にとつての現在の瞬間のうちに含まれるためである。

ミクロに観察するならば、感覚―運動システムとしての生物も一群の物理化学のプロセスだけから成り立っており、何か別種の「非物理的な」要素が構成素として紛れ込んでいるわけではない。そこから、だからやはり粗視化しているのは理論家だ、という人もいるかもしれない。だが、そうならば、完全に任意の時間スケールで行うことができるが、それらのほとんどに意味はない。事象を適切に記述できるスケールが存在するということは、事象に内在的な制約があると考えるのが自然であろう。

また、これを上位スケールが実在か否かについての实在論論争にするのは適切な対応ではないと、私は考えている。われわれは今、意識というものがこの宇宙でどうやって成立したのかを合理的に理解できるようなピクチャーを求めている。現在認定されている要素的な物理的事実だけからはこれを成功裡に説明できていない現状に鑑みれば、そのような見方が見落

としている何かがあると推定するのも一つの合理的な選択肢であり、その候補として上位スケール（とそれによる相互作用的粗視化）の存在を検討しているのである。そうした文脈から切り離して、真偽の問題であるかのように争うのは近視眼的な態度に思われる。

4-2. 生きられる類似

生物が何種類の知覚刺激を弁別できるかは、当の生物の反応のレパートリーによって決まってくる。「私の身体を取り巻く諸対象は、それらに対する私の身体の可能的行動を反映している」(MM, 15-16 [26])。反作用の側から作用が週行的に規定されることを、ベルクソンが「鏡のように」(ibid.) 反映すると表現していることから、これを「鏡映原理」と呼ぶ¹⁷⁾。生物の側の反応の時間分解能を知覚に反映させる凝縮は、この鏡映原理の一つの現れとみなせる。

秤の例は、重さという一次元量の粗視化にすぎないが、生物の環境に対する反作用となると、この鏡映原理のもたらすものは格段に複雑になる。つまり、物理的な時空配列上で近傍にあるものの粗視化ではなく、類似性の離散化と再配置が起るような粗視化が引き起こされる¹⁸⁾。本稿では、前者を「単純凝縮」、後者を「高次凝縮」と呼んで区別することに¹⁹⁾する。例えば、ベルクソンに倣って、一群の雑草を区別せずに食べるが、岩や木は食べない草食動物を考えよう。「食べる」という種類の運動出力をトリガーする知覚刺激は、(草はそれぞれ異なっているため) 実際には多種多様なパターンであるが、そうした差異は無視され、みなひとしなみに「食べ物」というタイプとして知覚される²⁰⁾。

つまり、下位スケールの類似性空間においては必ずしも近傍にない多様な刺激パターンが、上位で「一つのまとまり」として振る舞うのがポイントである。この新しい類似(タイプ)が、上位スケールでは「客観的な仕方、一つの力のように作用し、いつも同じ反作用を引き起こす」(強調引用者, MM, 177 [231])、とベルクソンは記述している。これは、この草食動物の環境との相互作用において、このように再編された類似性次元が、現実には、因果的に機能する要素的な単位をもたら

すと考えていると読める。⁽²¹⁾

実際、その構造的由来に照らしつつ、改めてわれわれの神経系の本来の役割について考えていただきたい。われわれが目にするのは、非常に多様な知覚器官が、中枢を介して、いずれも同じ運動器官に結びつけられていることである。感覚とは安定しないものであり、きわめて多様なニュアンスをとりうる。⁽²²⁾ 反対に、運動器官は、ひとたび組み上げられれば、変わることなく同じように機能する。したがって、あれこれの知覚が、その表面的なニュアンスに関してどんなに異なつていても、構わない。もしそれらが継続されていく先が同じ運動的反作用であれば、…そこからは何か共通したものが浮かび上がってくるだろう。こうして、一般観念は、それとして表象される以前に、すでにまず感じられ、こうもちがっていることだろう（強調引用者、MM, 178 [232]）。

この「新しい質」のことを、ベルクソンは「生きられる類似」と呼んでいる。「生きられる (vécu [lived])」とは「体験される」(ドイツ語で *erlebt*) に相当する単語であり、「感じられ、こうむられ (sentie, subie)」といったパラフレーズとともに、はつきりと現象的な質を指し示す。⁽²³⁾ だがここで順序を取り違えてはならない。(動物がすでに現象経験を持っているから、類似したものと感じられる) というのではなく、逆に、(相互作用のシステムとして新しい区別の仕方を導入することから、動物の現象性に新しい次元が成り立つ) と考える。現象性はここでアプリオリに導入される説明項ではなく、被説明項である。そして、その「現象性」を自然現象として連続的に発生させようとしている。そうでなければ、わざわざ秤や検電器を持ち出した意味がない。

ある草食動物にとって同じ反作用を引き起こす一群の刺激が、物理的に見て互いに類似しているとは限らない。また逆に、物理的に十分に類似した二つの刺激が、生物にはつきりと異なる反応を引き起こす場合もある。そもそも「物理的に類似」

という表現にも注意が必要だ。ベルクソンは、幾度となく「無条件的な類似」という概念を批判しており、類似は常にある特定の問題解決の文脈のもとでしか定義できないと語っている²⁴。

類似一般など何でもありません。なにせ、すべてはすべてに似ているのですから。それはあくまでも、達成しようとしている行為の観点から見た類似です（強調引用者、CdFM, 129）。

渡辺慧による「みにくいアヒルの子の定理」を思わせる主張であるが、類似についても一貫して相互作用解釈、そして鏡映原理を適用していると解釈できる。

純粋な認識ないし純粋な知覚の領域では、一切は一切と類似し、一切は一切から区別され、類似ないし差異の連続性があるのに対し、行動とは、反対に、非連続な何かなのです。行動は行われるか行われなにかのいずれかです。…運動メカニズムは、限られた、決まった数しかなく、…したがって、グループ化がなされなければならず、また、「様々な差異は」それら自体大きかったり小さかったりするけれども、生物のしかじかの反応という観点から見れば大差ないような様々な差異は消去されなければならないのです（強調引用者、CdFT, 70-71 [76]）。

反作用のバリエーションが作用の側のそれを決める鏡映原理は、物理的次元から共通と考える。現に、ベルクソンは、上の草食動物の下りで、塩酸と炭酸カルシウムの化学反応も引き合いに出してさえているのだから（MM, 177 [231]）。そうすると、持続の多元論の還元不可能性は、ベルクソンの提供する論点を総合して以下のように換言できる。すなわち、まずは、（われわれが「それ自体における」類似と考えるようになる）物理世界がもつ識別可能性自体からして、相互作用の中で要素的物

質が取りうる反応可能性のバリエーションによって規定されている、と捉え直せる。化学的類似は、化学的²⁶⁾反応によって定まる。その上で、より上位の階層においてある生物と環境との相互作用が供給する世界の識別可能性は、物理階層の識別可能性領域においては必ずしも連続しない複数の諸要素を一つの要素(質)としてプロットし、かつ生物の取りうる反応可能性のバリエーションによってそれらの要素が新しく編成しなおされている。だから物理階層に還元できない、と。

スケールを追加しながら相互作用し続ける世界の中で、高次凝縮による新しい質次元が次々と切り開かれていく。ベルクソンの思い描く、感覚質の登場と進展を、まずはこのように要約することができよう。時空的な意味での近接作用(ミクロスケール)だけで駆動する物理的相互作用においては、類似性も、その時空的近接性に束縛されている。だが、スケールが拡張することにより、凝縮の範囲が単純に外延的に広がるだけでなく、再配置のために「近接から自由な類似」が成立する(高次凝縮)。すると今度は、この新しい類似によって現実の生物の行動がドライブされるから、近接が変わってくる。『物質と記憶』第3章は、低階層の「行為の平面」では「類似と近接は一つに溶け合っ」(MM, 273 [348]) いるが、より上位階層へと移行するにつれて「類似と近接は分離していく」(*ibid.*)と述べている。

類似についてのベルクソンの理解の特筆すべき点は、ここまで見てきたように、それらが単なる刺激入力²⁷⁾の局面だけを切り離して成り立つものではない、という点である。質空間の再配置を定義しているのは、生物の反応可能性、すなわち獲得済みの運動機構のセットである。そこには少なくとも「情緒的感覚(sensation affective)」「情感(affecton)」と呼ばれる質感が伴う。自分の身体がとりつつある反応行動の現象的な感じが、廻行的に対象側に帰属させられる。「自動感²⁸⁾は運動ないし運動傾向に付随する感じです。しかし、この感覚は、運動の領域から知覚の領域へと廻って、これらの知覚に再認と馴染みの徴しを刻印するのです」(CFM, 105)。快苦のような情緒的感覚を、身体内部で「生まれつつある反作用」の意識に帰着させる発想は、すでに『試論』から見受けられる。『物質と記憶』の知覚理論は、これを一般化し、高次の感覚質の成立における行動の重要性を大幅に組み込んだものと言えるだろう。

4-3. 感覚質から区別された気づき

第三段階として、気づきを検討する。感覚質と気づきの独立性について、第3節では「感覚質なしの気づき」の可能性を指摘したが、逆の「気づきなしの感覚質」を認めるかどうかについては、現代でも意見が分かれている（現象意識とアクセス意識にまつわる論争を参照²⁸⁾）。

まず、ベルクソンは「気づきなしの感覚質」をはっきり肯定していることを確認しよう。『意識に直接与えられたものについての試論』（以下『試論』と略称）からの一節である。

私がこの何行かを書き記している瞬間に、隣室の掛時計が時を知らせている。しかし、私の耳は上の空で、すでに鐘がいくつも鳴るのを耳にした後でしかそれに気づかない（ne s'en aperçoit que）。だから、私は鐘を数えてはいなかったのだ。とはいえ、すでに鳴った四つの鐘の音の総和を求めて、それを今耳にしている鐘の音に付加するには、遡行的な注意を向けるべく努力するだけで私には充分である。自分自身のうちへと立ち戻って、たった今生じたばかりのことを私が慎重に問いただすならば、私は、最初の四つの音は私の耳を打ち、私の意識（ma conscience）に訴えさえしていたが、その各々が産出する諸感覚は、互いに並置される代わりに融合して、その総体に固有の相貌を付与し、これを一種の楽節たらしめていたということに気づく（DI, 94-95）。

ここで気づかれないまま融合していたとされる「諸感覚」は、同書の第一章から力説されている通り、質的な意味でのそれであることははっきりしている。「感覚質」は上の空であっても成立していて、「気づき」の外であっても私の「意識」に届いている。それゆえに事後的にでも、感覚質に基づいた照合が可能だというのである。

したがって、ベルクソンは、気づきの意味での意識に捕捉されていないからといって、感覚質でありえないとは考えてい

ない。⁽²⁹⁾つまり、二つの意味の意識（第3節で見たa. とb.）を区別している。なぜか。それは、「知覚野全体から顕著な部分を切り出す仕組み」と、「物理刺激を感覚質たらしめる仕組み」が異なるからである。気づき自体に機能面と現象面があることを3節でみたが、ここで区別しているのはその両者ではなく、「気づき固有の現象面」と「気づきの有無にかかわらず成立する現象面」（感覚質の現象面）である点に注意されたい。すでに見たように後者をもたらずのが凝縮である。これは環境の物理刺激との時間スケールギャップに起因するものであるから、マクロな生物が環境と相互作用している限り自動的に（つまり気づきの有無に関わらず）成立する。

では、気づきの理論的説明としては、ベルクソンは何を提供しているか。私は、『物質と記憶』第1章の純粹知覚論に見られる「意識的知覚」がそれに該当すると考える。というのも、そこでは明確に「全体と部分」の関係が扱われているからである。「意識的なものである限り、知覚とは、その物質のうちでわれわれのさまざまな欲求に関係するところだけを分離なし「分別」することにほかならない」（MM, 75-76 [96]）。問題はその実装のされ方であり、どのようにしてそれが「気づき固有の現象面」を与えるか、である。

この主張そのものは、意識的知覚の「減算説」として研究者の間でも知られている。しかし、そこではしばしば情報の「選別」それ自体が無条件に意識的知覚を成立させるかのように語られており、なぜ、そのように選別された部分が（単なる感覚質ではない意味で）意識的とされるのかは、明らかとは言い難い。否、それ以前にこの「選別」ということ自体が、相互作用説で知覚を考える理論にとって具体的にどのような変化を指すのか、それも自明ではない。というのも、そこで選別されなかった物理刺激がこの宇宙から突然魔法のように立ち消えるわけではない以上、その刺激に対する反作用もまたやはり存続しているのであるから。

この水準での説明機能を果たすのが、遅延説であるという解釈を、筆者は別稿（平井（2019b））において示した。すなわ

ち、減算説を遅延説が根拠づけるという説明依存関係である。私たちの知覚においては、同時並列的に複層的な処理が走っており、それら同士の遅速差によって、相対的に（時間次元を利用した）図地分離が生じると考えるのである。

ベルクソンは、物理的な水準での相互作用を、時間軸において見たときに、作用に対する反作用の遅延がゼロである、あるいは少なくとも無視できるほど小さいという意味で、ミクロな時間スケールに属すると考えている⁽³⁰⁾。他方で生物にとって関与的な刺激は、回路の「非決定性」⁽³¹⁾ゆえに必要な時間的迂回を経るため、「一時的に引きとどめられる」(MM, 40 [55])。低階層の「速い処理」を「地」とすることで、関与的な、それゆえ高階層の「遅い処理」が、持続の遅速のギャップにおいて、相対的に滞留することにより「図」と化す⁽³²⁾。「非決定性地帯は、…現にあるものに何も付加しない。ただ単に実在的作用は通過し、潜在的作用はとどまるようにする」(MM, 36 [51] ; cf. 261 [335])。これが気づきの次元をもたらず。こうして、生物がいなければ即座に反作用で相殺されていたはずの環境中の物理作用の「一部」が、選択的な仕方です「遅延」され後続する時点へと持ち越された結果、下位時間層の一瞬間のタイムスライスだけで見るならば「減算」されているかのような事態が成立する、という説明依存関係が見えてくる。

この解釈が正しいとすれば、ベルクソンは、図地分離という気づきの「機能」を、一種の時間的不揃いさによって実装されるものと考えていることになる。そしてこの特定の実装のされ方が、「気づき固有の現象面」を提供すると考えることは、ここまで見てきた彼の枠組みの中で自然に理解できる。同一個体内部でのローカルな凝縮を想定できるからである（ただしこの点について彼は明言していない）。また、連続的に「流れる持続」（意識の流れ）にとって重要と思われる継起的な意識的諸事象の「相互浸透」（オーバーラップ⁽³³⁾）も、この解釈では自然に理解できる。私たちの日常の時間経験の基本階層をなすこの階層を、「私の現在」と呼ぶ。

4-4. 心

さて、前節の引用中で、「気づかなかった」間にも鐘の音は「意識に訴えていた」、と言われる時の「意識」が、第3節で挙げた「e. 心」の用例にあたる。ベルクソンでは、フランス語で「心／精神 (esprit)」や「人格 (personne, personnalité)」
「性格 (caractère)」といった語群がこの用例をカバーする。『物質と記憶』からとられた以下の用例も同様である。

例えばある学科を習得しようと練習しているとき、いくつもの運動で組み立て直そうとしている視覚的または聴覚的なイメージは、すでにわれわれの心 (esprit) のうちでは、不可視でありながら現在である (invisible et présent) のではないか。一回目の復唱から、われわれは今自分が何か間違えたのを、ある漠然とした違和感によって認める。意識の暗い奥底 (les obscures profondeurs de la conscience) から一種の警告を受け取るかのようなのである (強調引用者、MM, 92 [120])。

普通の意味では無意識と呼びたくなるようなケースである。前節での『試論』からの引用と同じく、この広い意味での意識において「記憶」が問題になっているのは偶然ではない。「私の現在」のスケールでは非関与的な扱いを受け、遅延された気づきの舞台上登ることがなかった経験の要素も、その時間窓から出た瞬間に立ち消えてしまうわけではない。それはさらに上位の時間スケールでは窓がまだ開いているからである。

過去を素材として心を構成するのは、彼の基本テーゼである。⁽³⁴⁾すでに『試論』から、心は「過去の経験全体」できていると論じられていたが、『物質と記憶』でその考えはより詳細な心理学的メカニズムを実装する形で発展的に継承されている。⁽³⁵⁾

本稿では、従来扱いが難しいとされてきた純粹記憶理論における過去の保存そのものを、マルチスケール時間論の枠組み

で捉え返し、さらに、トップダウン的な注意および心的因果を、上位の時間スケールからの（多数の中間階層を経た（MM, 145-146 [90-191]）下位の制御として——「時間的に解釈された、一種の下方決定」として——捉える解釈を採用する。

まず、記憶をマルチ時間スケールで解釈するとはどういうことか。³⁶ 持続の多元論では、現在と過去の時制的区別がスケール階層に相対的になるため、ベルクソン自身が出す赤色光の例のように、電磁波スケールにとってはすでに過去、去であるはずの膨大な振動が、生物知覚の時間スケールでは一「瞬間」のうちに含まれて現在（の一部）をなす。これと同じように、気づきが成立するような「私の現在」の時間窓をあふれてすでに過去となつていくような数々の出来事も、さらに上位の時間スケールにとつてはなお現在、でありうる。しかも、これも感覚質の凝縮におけるように、過去の出来事は系列的なままではいられず、一種の時間的圧縮をこうむりつつ一つの「総体」を形成する。この「凝集された（condense）形のもとの」「過去の状態全ての現働的総合」（MM, 162 [212]）が、ベルクソンが心として考えているものである。

なぜ、そのような上位階層を認める必要があるのか。前節までで描いてきたわれわれの経験の基本的な場は、外界との感覚—運動的な相互作用の階層であった。それはすでに見てきたように、感覚質や高次凝縮による類似によつて再編された経験次元である。それゆえたしかに、物質の階層に対しては上位に位置する。だが、そうした外界とのやりとりは、行為が基本的に外因的刺激により引き起こされていることを意味し、気づきにおけるようなボトムアップの時間的遅延はあるものの、そこへ能動的に介入する独立した「意図」の起点を見出すことは期待できない。それを担保するのは、「私の現在」のスケールに対して、さらに上位に位置するスケールだ、それゆえに心は過去でできている、という理路である。実際、ベルクソンは「意図（intention）」を、この記憶の総体としての心を指すものとして利用している（MM, 145 [90]）³⁷。

同じ私が、オーバラップする無数の感覚—運動ループとして気づき次元の意識の流れ経験を営んでいると同時に、それと一緒に流れてしまわぬ、相対的に安定したリソースを残している。さもなくば、そうした経験についてのメタ認知を持つこともできないだろう。こうして、第3節で分類した「c. 注意」「d. 自己意識」「e. 心」が出揃う。「注意的再認

(reconnaissance attentive)」(MM, 128 [168]) も、トップダウンのイメージ投射を含む働きである。

4-5. スケール可変性

だが、「c. 注意」およびそこに含意される「意図」の成立には、新しい論点が介在してくる。それは、スケールの動的な可変性である。現に「注意 (attention)」(MM, 114-116 [150-152]) も「解釈 (interpretation)」(MM, 119 [156]) も「一般観念」(MM, 180 [234]) も、そしてもちろん、エピソード想起のプロセスも、記憶逆円錐上での凝縮率を動的に可変させることで説明されている。

「私の現在」までの議論と比べて、過去全体の保存というのは急激に大きなスケールに移行したという印象を与えたかもしれない。特に、急に生理学的な基盤から逸脱したかのように感じられたかもしれない。だが、そもそも「私の現在」の幅、その上限は、生理学的に「固定」されたものだろうか。

現在について語るとき、私たちの意識は私たちが有る持続の幅を考えていると告げています。では、それはどれだけの持続でしょうか。それを厳密に固定するのは無理です。それはかなり浮動するものです。例えば、今この瞬間、私の現在が発音しているこの文章です。しかしそうであるのは、私が自分の注意の領域 (champ de mon attention) を自分の文章に限定しようと思っているからです。私のこの注意は、コンパスの両端のように広げたり縮めたりできます。…したがって、私たちが現在と過去の間に立てる区別は、恣意的なものであるとは言わないまでも、少なくとも私たちの生への注意がカバーすることのできる領域の広さに相対的なのです。「現在」なるものは、ちょうどこの努力と同じだけの場所を占めるのです (PM, 168-169 [236-237])。

確かに、『物質と記憶』では、感覚ー運動システムとしての身体が要求する時間長によって「私の現在」が定義されることだけを述べており、可変長であることは明言されていなかった（感覚は直接的過去、行動は直接的未来によって構成される.. MM, 152-153 [201-202]）。しかし、人間レベルのマクロな相互作用サイクルの「一つ分」なるものがどうやって定まるかということを考えてみれば、固定長というのが勝手な思い込みであることがわかる。環境との電位差によって運動が定まってしまうゾウリムシならいざ知らず、人間であれば、その環境へのアウトプットは具体的には「行動」である。そして、その行動は、反射的なものから複数ステップの下位手順によって構成される計画的なものにいたるまで多様である。現にベルクソンは、「近接的未来（*avenir prochain*）の図式」としてそれを語っている（MM, 160 [210]）⁽⁸⁾。

それらの神経基盤を考えることは、十分に可能であるはずだ。私の理解する持続の多元論は、それを排除しない。むしろ、矛盾しないどころか、高次凝縮の場合と同じく、運動記憶力との協働なしの凝縮記憶力だけでは、上に挙げた意図やエピソード想起といった高次機能を実現することはできないことを、ベルクソンは繰り返し強調してさえた（MM, 91 [119]: 169 [221] など）⁽⁹⁾。ただし、神経基盤を考えるということは、行動そのものが依拠する高階の質次元ではなく、その物理的階層における相関者を考えることだという点には注意が必要だ。

われわれ人間も、目覚めている間中トップダウンの能動的な決定を下しているわけではない。与えられた現在スケールのタスクを近視眼的にこなす方が楽であるし、日常の大半はそのようにして営まれているかもしれない（Cf. DI, 128 [190]）。だが、多くの動物と異なり（MM, 87 [115]）、われわれは必要に応じて、環境とのリアルタイムの掛け合いに埋もれがちな「現在から離脱（*se détacher du présent*）」（MM, 87 [115]: 148 [196]）して、上の階層に移行できる。それを表すのが、しばしば登場する「身を置き直す *se replacer*」という表現である（MM, 148 [196]: 171 [224]）。そこには、いわば自らの人格を抱きかかえ直すような知的態度のシフトがあるとベルクソンは言う。エピソード記憶の喚起プロセスや、意図的な注意や解

積分プロセスの起点においてこの表現が用いられるのは、一つの同じこの私自身がより俯瞰的な上位スケールへと移行することができることを含意していると考える。

「私の現在」は、なるほど物理階層に対していくらか上位に位置するが、依然として感覚ー運動の流れという制約に束縛されている。近接する感覚質の相互浸透は認められるが、諸要素の大幅な再編の自由度は与えられていない。それに対し、「私の人格」の階層にまでくると、「並進と回転」という、より多次元の自由度が出てくると想定されている。並進は逆円錐の縦軸の移行であり、記憶の凝縮率を制御する。他方で回転は、記憶の同一階層における部分へのフォーカスであり、知覚への気づきの場合と同じく習慣記憶力がそれを制御している。この自由度がどうして出てくるのかの説明を、残念ながらベルクソン自身は与えてくれない。そのためここも推察により補うほかないのだが、下位の諸階層は、それだけ生理学的な構造への依存度が高く、上位の階層に移行するにつれて、その分高次凝縮による新しい相互作用の単位次元が開拓されることから、動的な可変性が得られるのかもしれない。

意識という主題について、感覚質、生きられる類似、気づき、注意といった多義性を区別しつつ概観してきたが、重要なことは、ベルクソンにおいてこれらの諸機能は、つねに一貫して、システムの時間構造の諸変形に起因するものとして説明されているという点である。同じ機能を説明するのに、例えば物質の同一スケールで語ってしまうと、単なる回路の違いになっしまい、当該の意味での意識の機能面は説明できたとしても、現象面はできない。追加で、クオリアが神秘的に随伴するのを待つのはあまり得策とは言えない。それにたいして、ベルクソンの説明は、機能に対して独立の心的実体を持ち込んでくるのではなく、機能の実装の仕方によって、具体的には時間構造の変形という実装によって、各段階での現象面の説明を提供している。少なくともそのように解釈できる、ということを示すのが本稿の目的であった。細心の注意を払ったが、なお勘違いや見落としがあるかもしれない。批判を踏まえて更新したい。

註

- (1) 本論文は2019-2021年度科学研究費補助金・基盤研究（B）（課題番号：19H01190）、福岡大学推奨研究プロジェクト（課題番号197002）、同領域別研究チーム（課題番号203004）の成果を含む。
- (2) 例えば『意識に直接与えられたものについての試論』『物質と記憶』『創造的進化』のいずれにおいても200件を超える用例が見られる。
- (3) Macphail (2008), p. 118.
- (4) デネットやチャーチランド。山口 (2012)、147頁以下に詳しい解説がある。
- (5) 平井 (2020) を参照されたい。
- (6) Ginsburg, S. & Jablonka, E. (2007) の表現 (p. 220)。
- (7) この点に注目した、ベルクソンによる現象的外在主義の擁護の試みが Borghesi & Golshani (2016) にみられる。平井 (2005) も参照。
- (8) 構成関係がいかにして同一性関係から区別されるかについては倉田 (2017) にわかりやすい解説がある。
- (9) 意識の内容とレベルを区別して、前者を気づき、後者を覚醒と呼ぶ慣習があるが、みていくように「内容」に多数の混乱がある以上、この区別は大きすぎるし、逆に、Overgaard, M., & Overgaard, R. (2010) の指摘するように、内容と覚醒レベルが独立であるかについても疑念の余地がある。
- (10) Zeman (2001) は、意識の意味を三つに区分しその三つ目として「consciousness as mind」を挙げている。「命題的な内容を持つあらゆる心的状態」(p. 126) とあるが、具体例として「あなたに負担を強いていることを意識している」(*ibid.*) といった状態を挙げているおり、いわゆる無意識を含める本稿での区別とはやや異なる。
- (11) ある箇所でベルクソンは、脳活動に随伴するだけで何の働きも持たない随伴現象説の意識を、教室の外に立たされて何も言わせてもらえない「罰をくらった子どものよう」と例えて痛烈に揶揄している (PM, 137)。Worms (1997) も、感覚質は現象内容だけではなく「働き」を持つことを指摘している (p. 240)。生物学の哲学における機能の起源説と整合する。Cf. 大塚 (2010)。

- (12) ここで直観に訴えていることは念のため明記しておく。当然この直観が一致しない可能性もあるわけだが、ここでの目的のためには、この直観を明示的に同定しておくことが重要である。
- (13) Connor, et al. (2004) など。
- (14) Posteraro (2019) は、『創造的進化』における「水路づけ (canalization)」の問題を時間スケールの観点から解釈しており興味深い。
- (15) 他にも金箔検電器の例など (Cd/T: 70 [77])。
- (16) ただし、別なところで詳しく論じたように (平井 (2020))、ベルクソンは物質に「希釈された」(MM, 234 [30]) 形でいわゆる「ミクロな質」を帰属させ、チャーマーズのいう「質の組み合わせ問題」(Charmers (2017)) に対してシステムの時間スケールギャップによって答えている形になる。
- (17) 行動可能性の鏡映として知覚を捉える見方を、Posteraro (2019) は、A. Chemero のエナクティヴィズムに引き較べている。
- (18) したがって、もはや単純な意味での「スケール」だけの推移ではなく、凝縮記憶力と運動記憶力の掛け合わせによるが、スケールの拡張が可能になっている事態ということでもあり、一貫性のためスケールの語を用いる。運動記憶力が介入することで、時間的にも離散化・タイプ化されている点に留意されたい。
- (19) この最下層の凝縮によって生じた感覚質のことを岡嶋 (2020) は「感覚的多様体」と呼んで、より高次の質的多様体から区別している。
- (20) 行動可能性が類似を決めるという鏡映原理を貫いて説明するなら、私たちがそれらを細分し「ハコベラ」とか「イネ科」とか言えるのも、その区別の粒度に対応する反応可能性を人間身体が (主に言語を通じて) 獲得しているからであると考ええる。「それ自体としての類似」などない。
- (21) 註11を参照。
- (22) 感覚器官自体の解像度は相対的に高いという点を見逃してはならない。すなわち、同じ生物の部分 (感覚器官を中心身体とする出入口) と全体との間に識別可能性のスケールギャップがあると解釈できる。一つの感覚器官単体で見た時にも、応答側の分解能が入力の粒度を決定するという鏡映原理は維持されており、その観点からローカルには相対的に分解能が高いわけだが、その

- 識別可能性が感覚・運動系全体としての一生物個体としては運動側の「鈍重」(paresse) (CdtF, 88 [73]) によって潰れる。これは、一つの生物身体のうちに、スケールギャップによる粗視化の効果が入り込んでいることを意味するだろう。
- (23) 明瞭に言語的に分節された一般概念に先立ちつつ、特定の特徴のパターンを質的に再認できる「再認概念」の一種とみなすことができる。鈴木 (2015)、52頁。
- (24) 知覚の地平からより高次表象の地平に移っても、類似はやはり「意志の能動的活動」(MM, 183 [238]) と関連づけられ、観念間の類似はそれと相対的にしか定義できないとベルクソンは言う。「知的努力の場合には、相継起するイメージは、互いの間に外的な類似性など一切持っていないこともありうる。それらの類似は、まったくもって内的なものだ。それは意味の同一性であり、問題を解決する能力の等しさである。これらのイメージは、その具体的な形態は異なるにもかかわらず、ひとつの問題に対して、互いに類同的ないし補完的な位置を占めているのである」(強調引用者、ES, 189 [264])。
- (25) この現象性に、運動記憶力が中心的な寄与をしていることは見やすいだろう。だが正確には、それと凝縮記憶力の掛け合わせの効果であると解釈できる。註27を参照。
- (26) 「それ〔生きられる類似〕は、ほかならぬ習慣が運動の領野から思考の領野へと遡ったものだったのだ」(MM, 179 [233])。
- (27) これから身体が起こそうとしている変化を予告する質的符牒として機能するというアイデアである。曰く、情緒的感覚は「準備されつつある反応の本性をなんらかの明確な徴しによつてわれわれに知らしめる」(DI, 25 [45])。この予告を、感覚の「機能」と彼が考えていることは以下の表現に伺える。「さもなければ、…感覚は、いかなる存在理由も持たないことになるだろう」(DI, 26 [46])。さらに『物質と記憶』では、この身体内部の体性感覚自体を「情感 (affection)」と呼び、これを有機身体の部分の反応と全体の反応の不一致からくるものと説明している (MM, 55-56 [73-74])。
- また、(詳しくは別稿に譲るが) タイプ的に折りたたまれた凝縮記憶の論点を加味するなら、この類似にはすでに記憶の凝縮が入っていると考えるのが合理的である。というのも、ベルクソンはこの生きられる類似を、一方で「思考される一般性」、他方で「個体の識別」の祖型とみなしており、後者は凝縮された記憶の拡張によつて説明されるべきものだからである。
- (28) ネット・ブロックを中心としたこの論争については、太田 (2008)、佐藤 (2012、2014) を参照。引用した鐘の音の例は、変化音の一種と解釈できる。なおゴドフリー＝スミス (2016) も、意識的でなくとも「主観的経験」ではありうるという同様の立場を

表明している（邦訳23頁）。

- (29) 『試論』においては感覚質の凝縮説はまだ出てきていないが、心的なものとしての感覚質と気づきの区別の論点については変わらぬ見解を維持している。3節において見たような「感覚質なしの気づき」については、汎質論においては当然その余地がないが、凝縮を介した感覚質のみに限定すれば、話は別である。

- (30) 物質における相互作用のことを、ベルクソンはしばしば「自分が受け取るものの全体を伝達し受けた作用それぞれに反対向きの等価な反作用を対立させる」(MM, 33 [47]) とか、「方向が逆で相殺し中和し合っている (se compensent et se neutralisent) 二つの等しい量である」(EC, 14 [184]) などと表現し、時間的にミクロであることを、作用と反作用が直ちに相殺し合うという意味で「中和」と表現する。逆に言えば、遅延はここから「脱中和」を引き起こし、それが気づきの意味での意識をもたらずと考えているわけである。

- (31) この文脈でベルクソンが用いる「非決定性」は、種レベルであらかじめ決定された反射的反応ではなく、リアルタイムでの応答制御が必要というほどの意味である。

- (32) 意識が「現実的行為ないし直接的実効性の同義語」(MM, 157 [206]) として用いられるのはこの文脈である。「通過の際にわれわれが引きとどめたもの、われわれが影響を与えうるものだけを引き剥がす (détacher)」(強調引用者、MM, 34 [48])。この時間的な図地分離も、ここまでの議論分節に従って多層的に捉えるべきだろう。すなわち、より正確には、高次凝縮により質化された階層内での遅延差の下には、生物体のマクロな反作用によって高次凝縮されない（生きた類似にならない）階層、さらに下に、感覚器官レベルでの反作用によって単純凝縮されない（感覚質にならない）階層を想定できる。

- (33) デイントンのオーバーラップ説、ストローソンのパルス説については、佐金 (2017) に解説がある。

- (34) 従来の解釈のもとでも、過去によって心を定義する戦略の眼目は、物質的身体から相対的に独立の非物理的存在者の候補として、何か霊的・幻想的なものを持ち出さず、世界の實在的過去の一部を利用する点、そして心身問題を過去と現在の関係に置き換える点などにあると言えるが、肝心の過去の存在論的な位置付けに不透明さがあった。マルチスケール時間論に基づく本稿の解釈では、この過去と現在の時制的区別を、異なる時間階層の上下関係を介して再描画する形になる。

- (35) 心が過去全体でできている点だけでなく、内部的な階層性がある点（深層と表層）も、すでに『試論』から見られるが、スケー

ルの動的な、可変性が入ってくるのが『物質と記憶』での変化である。また、試論』における「相互浸透」「融合」は、一定程度の「凝縮」が効いていると解釈できるが、可変性がない点で『物質と記憶』のそれとは理論的な役割が異なるかもしれない。

(36) この純粹記憶のマルチ時間スケール解釈については、別な論考を準備中である。

(37) 記憶の逆円錐の変形において、全体が主導するケースと部分が主導するケースを分け、前者を意志的な活動とする解釈を石井・平井 (2005) に示した。

(38) そしてその極限として、『試論』で語られる、過去全体から発出するものとしての「自由行為」がある。

(39) 小関 (2000) は、過去を無際限ではなく私の過去に限定するのに身体が役を果たすことを指摘している。

略記号

ベルクソン著作からの引用にはすべて *Quadrige* 版、講義については以下の版を用い、略号で示した。訳は各邦訳も参照し、参照の便宜のため、原著ページと合わせて □ で訳書のページ数も指示した。

DI: *Essai sur les données immédiates de la conscience*. 『意識に直接与えられたものについての試論』(合田正人・平井靖史訳) ちくま学芸文庫、2002年。

NM: *Matière et mémoire*. 『物質と記憶』(杉山直樹訳) 講談社学術文庫、2019年。

EC: *L'évolution créatrice*. 『創造的進化』(合田正人・松井久訳) ちくま学芸文庫、2010年。

ES: *Énergie spirituelle*. 『精神のエネルギ』(原章二訳) 平凡社ライブラリー、2012年。

PM: *La Pensée et le mouvant*. 『思考と動き』(原章二訳) 平凡社ライブラリー、2013年。

CdFT: *Histoire de l'idée de temps: Cours au Collège de France 1902-1903*. 『時間観念の歴史』コレージュ・ド・フランス講義1902-1903』(藤田尚志・平井靖史・岡嶋隆佑・木山裕登訳) 書肆心水、2019年。

CdFM: *Histoire des théories de la mémoire: Cours au Collège de France 1903-1904*.

参考文献

- Borghesi, S. B. & Golshani, M. (2016) "A Bergsonian Approach toward Phenomenal Externalism: Rendering Unity", *Filosofjska Notiser, Årgång 3, Nr 3*, Oktober 2016, 61-78.
- Bouton, Ch. and Huneman, Ph. (eds.) (2017), *Time of Nature and the Nature of Time*, Springer.
- Bruntrup, G. & L. Jaskolla eds. (2017) *Panpsychism*, Oxford University Press.
- Chalmers, D. (2017) "The Combination Problem for Panpsychism" in G. Bruntrup & L. Jaskolla eds. (2017), 179-214.
- Connor, C. E., Egeth, H. E., & Yanis, S. (2004), Visual attention: bottom-up versus top-down. *Current biology : CB*, 14 (19), R850-R852.
- フラインバーン&ブランク (2016 [2017]) 『意識の進化的起源 カンブリア爆発で心は生まれた』(鈴木大地訳)・勁草書房。
- Ginsburg, S. & Jablonka, E. (2007) Transition to Experiencing : I. Limited Learning and Limited Experiencing, *Biological Theory* 2 (3) : 218-30.
- ゴドフリー＝スミス (2016 [2018]) 『タコの心身問題 頭足類から考える意識の起源』(夏目大訳)・みすず書房。
- 平井靖史 (2005) 「イメージ・知覚のラディカルな外在主義」『哲学誌』(東京都立大学哲学会) 第47号、39-54頁。
- 平井靖史 (2019a) 「スケールに固有なものとしての時間経験と心の諸問題——ヘルクソン〈意識の遅延テーゼ〉から」, in 森田 (2019) 205-224頁。
- 平井靖史 (2019b) 「訳者解説」 in CdF 410-426頁。
- 平井靖史 (2020) 「ヘルクソンの汎質論」『現代思想』vol.48-8 138-151頁。
- 石井敏夫・平井靖史 (2005) 「記憶力活動のもう一つの「二形式」について」, 第17回ヘルクソン哲学研究会(慶応大学三田キャンパス 北新館1F会議室)・2005年3月12日。
- 倉田剛 (2017) 『現代存在論講義Ⅱ物質的对象・種・虚構』新曜社。
- Lesne, A. (2017), "Time Variable and Time Scales in Natural Systems and Their Modeling" in Bouton and Huneman (2017), 160-185.
- Liljenström, H. and P. Århem (Eds.) (2008), *Consciousness Transitions: Phylogenetic, Ontogenetic, and Physiological Aspects*, Elsevier.
- Macphail, E. M. (2008), "A bird's eye view of consciousness" in H. Liljenström and P. Århem (Eds.) (2008), pp. 97-121.

- 松本俊吉 編著 (2010) 『進化論はなぜ哲学の問題になるのか 生物学の哲学の現在』 勁草書房。
- 森田邦久 編著 (2019) 『《現在》の謎 時間の空間化批判』 勁草書房。
- 信原幸弘 編著 (2017) 『時間・自己・物語』、春秋社。
- 信原幸弘・太田絃史 (2014) 『シリーズ 新・心の哲学Ⅱ 意識篇』 勁草書房。
- Ogawa, T. and Komatsu, H. (2004), "Target selection in area V4 during a multidimensional visual search task". *J. Neurosci.* 24, 6371-6382.
- 太田絃史 (2008) 「現象性へのアクセス」『哲学論叢』(35)、70-81頁。
- 岡嶋隆佑 (2020) 「初期ベルクソンにおける質と量の問題——意識の直接与件についての試論」から『物質と記憶』まで』『哲学』第71号、126-137頁。
- 大塚淳 (2010) 「生物学における目的と機能」『松本 (2010) 第3章、53-74頁。
- Overgaard, M., & Overgaard, R. (2010), "Neural correlates of contents and levels of consciousness". *Frontiers in psychology*, 1, 164. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2010.00164>
- 小関彩子 (2000) 「ベルクソンにおける「私」『理想』(664)」、121-130頁。
- Posteraro, T. (2019) "The Virtual and the Vital: Bergson's Philosophy of Biology" (dissertation, The Pennsylvania State University).
- 佐金武 (2017) 「現象的自己と時間」『信原 (2017)』、5-35頁。
- 佐藤亮司 (2012) 「意識経験と報告可能性——ブロックのメッシュ論証に抗して——」『哲学・科学史論叢』(東京大学教養学部哲学・科学史部会 (14)、131-164頁。
- 佐藤亮司 (2014) 「視覚意識の神経基盤論争……かい離説の是非と知覚経験の見かけの豊かさを中心に」『信原・太田 (2014)』、81-130頁。
- 鈴木貴之 (2015) 「僕らが原子の集まりなら、なぜ痛みや悲しみを感じるのだろう 意識のハード・プロブレムに挑む」 勁草書房。
- Worms, F. (1997) *Introduction à Matière et mémoire de Bergson*, puf.
- 山口尚 (2012) 『クオリアの哲学と知識論証 メアリーが知ったこと』 春秋社。
- Zeman A. (2001) Consciousness. *Brain* 124, 1263-1289.